

Title	1930年代の在日フィリピン人留学生と国際関係--日本帝国によるソフト・パワー政策の一断面
Author(s)	木下, 昭
Citation	東南アジア研究 (2009), 47(2): 210-226
Issue Date	2009-09-30
URL	http://hdl.handle.net/2433/108383
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

1930 年代の在日フィリピン人留学生と国際関係 ——日本帝国によるソフト・パワー政策の一断面——

木 下 昭*

Filipino Students in Japan and International Relations in the 1930s: An Aspect of Soft Power Policies in Imperial Japan

KINOSHITA Akira*

Abstract

The purpose of this paper is to look into the relationship between international politics and Filipino students who studied in Japan during the 1930s. At that time, the Philippines was in the middle of a conflict between two empires: Japan and the United States. In this context, Japan tried to use Filipino students as a means to improve its soft power in the Philippines. In the first half of the decade, about 30 Filipinos were living mainly in Tokyo, with the majority of them studying at medical schools, in particular The Jikei University School of Medicine, Tokyo, which offered classes in English. But not all Japanese people welcomed Filipinos with many heavily prejudiced against them. In the mid-30s Japan set up new institutions to attract more international students but the number of Filipino students decreased gradually in the late 1930s because the fear of Japanese imperialism had spread in the Philippines. This paper contextualizes these historical developments to show the deep connections between foreign students and the international politics of imperialism adopted by Japan in its attempts to obtain hegemony before the Pacific War.

Keywords: international students, Japan-Philippine relations, 1930s, soft power

キーワード：留学生，日比関係，1930年代，ソフト・パワー

は じ め に

1930 年代は、日本の勢力圏であった台湾、朝鮮、満洲からだけではなく、非勢力圏の様々な国や地域の人々が日本に留学目的で集まった、興味深い時代であった。その中で、東南アジアからの留学生は、帰米日系人を中心とするアメリカや日本の勢力圏からの学生と比べて、その

* 立命館大学（非常勤講師）：College of Letters, Ritsumeikan University, 56-1 Toji-in Kitamachi, Kita-ku, Kyoto 603-8577
e-mail: akirakin@aol.com

数が著しく少ないがゆえにあまり注目されてこなかった。しかし、第二次世界大戦後の経済的社会的な紐帯の強化をへて、東南アジア諸国との人的交流のさらなる拡大が予想される今日、比較的まとまった数の留学生を受け入れるようになった最初期の彼らと日本社会とのやり取りを明らかにすることは、今後彼らとの良好な関係をつむいでゆく上で、意義があると考えられる。

なによりも、本稿が注目するのは、当時の日本政府による留学生政策と国際関係、そして来日した留学生を受け入れた日本社会の反応である。「留学」という行為は、国境を越えるがゆえに個人と教育機関との結びつきだけでなく、関係国の思惑や政策にも左右される。これは、今日10万人を超える留学生が滞日する状況が中曽根政権期の「計画」に沿う形で出現したことでもわかるだろう。したがって「留学」は関係国の内外政策、そしてその社会的影響をみる有効な視角となりえるのである。

留学生政策には、植民地支配の枠組みの中で行われるものがある。日本と東南アジアとの関係でこれにあたるのが、太平洋戦争勃発後に、日本占領下からその支配に沿った指導者となるべく送り出された南方特別留学生である。しかしこうした枠組みが存在しない場合でも、留学生は国際的な影響力の拡大、いわゆるソフト・パワーの獲得を意図した政策に組み込まれてきた。ソフト・パワーとは、「自国が望む結果を他国が望むようにする力であり、他国を無理やり従わせるのではなく、味方につける力」[ナイ 2004: 26] のことで、1930年代には、このパワーの獲得を意図した日本政府による積極的な政策展開が見られる。

この点では、東南アジア諸国の中でも、フィリピンは興味深い研究対象である。というのも、当時フィリピンは日本に最も近い「非勢力圏」であり、その帝国主義的拡大の直近の標的となるべき位置にあったからである。しかもフィリピンは当時アメリカの植民地であり、留学生による日本のソフト・パワー拡大政策は米比関係も意識し、影響されざるを得なかった点も、当時の国際関係を必然的に明示することになる。つまり、留学生政策を核にして、この三角関係の絡み合いをみることができるのである。本稿では公文書を中心にこの政策を概観したい。

加えて当然ながら、こうした政策の帰結を分析しなくてはならないが、本稿では来日したフィリピン人たちが日本でどのような学業に関わり、彼らをどのように日本社会が受け止めたのかに焦点を当てたい。¹⁾ そのために公文書に加えて、当時の資料、なかでも新聞記事を中心に扱う。というのも新聞はオピニオン・リーダーとして、留学生に対する一部ではあるが重要な日本社会の反応や視線を示す場であり、それを導く場と考えられるからである。

後述するように当時の留学生数、留学先については、不明なところが多い。しかし後掲の表でも示唆されるように、フィリピンからの留学生の大部分は、帝国大学やそれに準じるような

1) 当時（そして現在も）フィリピンという国民国家は形成途上であったが、本稿では今日フィリピンと呼ばれる地域出身者を便宜的に「フィリピン人」と呼ぶことにする。「中国人」や「日本人」も同様の意味で用いる。

大学、および一般的な私立大学ではなく、「手に職をつける」学問、専門技能の習得を目的に、主に医科大学（および日本大学の医学部）に所属していた。なかでも東京慈恵会医科大学（以下、慈恵医大と略す）は、とりわけ1930年代前半においてフィリピン人留学生の受け入れ先として著名であり、彼らに対する政策を日本政府が検討するにあたって、まず念頭に置かれる存在であった。そこでこれまで留学生研究では、ほとんど使われることがなかった同大学の卒業名簿や同窓会新聞なども本稿では積極的に用いることにする。なかでも同窓会新聞である慈大愛宕新聞は、学内の多様な情報を網羅しており、留学生に対する学内での視線を探ることができる。

当時のフィリピン人留学生については、リディア・N. ユー・ホセの業績がほとんど唯一のまとまったものである [Jose 2002]。その論文は様々な貴重な情報を提供しているが、1900年から41年までという比較的長期にわたる多様な論点を取り扱っている。本稿では、1930年代を議論の中心におき、この年代をさらに前半と後半に分けることで、その特徴を浮き彫りにしたい。またホセの論文は、当時の英字新聞と政府統計、公文書、インタビューなどを主に用いており、本稿で使用した日本語の新聞や彼らの留学先に残された資料は、新たな知見をもたらすことができると考える。なお基本的に、史料全般の仮名遣いや句読点は原文のままで、固有名詞を除いて旧漢字は常用漢字に書き換えて、掲載している。

I 日本の勢力拡大と留学生政策の実情——1930年代前半の動向

フィリピン発の留学は、基本的に植民地支配の枠組みの中で行われ、1898年まではスペインが、1898年以降はアメリカが、その宗主国として留学生を主に受け入れてきた [木下 2009]。²⁾では一部のフィリピン人が、なぜあえて日本を選択したのであろうか。この問いに普遍的に該当する答えを提示するのは困難であるが、いくつかの想定される要因を挙げることはできる。

基本的には、フィリピンとアメリカ、そして日本との「距離」が重要な影響を与えてきた。日本はもちろん地理的にアメリカよりフィリピンに近いが、当時これを意味あるものとさせたのは日本のソフト・パワーの拡大であった。ソフト・パワーは、吸引力と言い換えることもでき、ソフト・パワーを増大させる手段となる留学生を導くにも、このパワーが必要なのである。ソフト・パワーは軍事力や経済力といったハード・パワーと密接に関連し、その増大がプラスにもマイナスにも作用しうる [ナイ 2004]。近代日本では当初ハード・パワーの増大がプラスに作用し、日露戦争における勝利や近代化の成功で、アジア最初の大国として注目され、本格的に留学生を集めるようになった。これを受けて、1901年日本政府は「文部省直轄学校外国人

2) 当時、アメリカ国費留学制度によって渡米した奨学生（ペンシオナド：pensionados）と、自費留学生とがいた。

入学規定」を定めて、留学生の受け入れ制度を国家として整備し始める。この結果、外務省、在外公館、または日本国内の外国公館から紹介された外国人に入学が許可される道が開かれた。受け入れた留学生の大部分は中国（清国・中華民国）からであったが、フィリピンからの留学生も1910年代にすでに少なくとも10人前後いたと想定されている [Jose 2002: 68]。

この数は1930年代にいっそう増加する。もっとも、在日フィリピン人留学生の人数とその所属先は、それ以前と同様明確ではない。この主要な要因は、彼らの留学期間やその資格が多岐にわたったことである。当時は、一般の日本人と同じ正規学生であったもの、後述する課外生や外国人特別生のような「留学生特別枠」で滞在したもの、聴講生、そして研究・研修目的で教育機関や医療機関などに属した留学生がいた。したがって同年度であっても留学生数は一定ではない。同じ大学、例えば慈恵医大でも資料によって各年度の留学生の在学者数や卒業者数が異なることがめずらしくないのも、このことが影響していると考えられる。³⁾さらに、大学や専門学校に所属していた学生だけでなく、受験準備のために日本に滞在したものがあり、また卒業などで教育機関を離れ、日本で引き続き研修・就職していたものも「留学生」とされることがしばしばあった。後掲する内務省の詳細なデータ（これもあくまで目安程度に考えるべきである）のある30年代後半と比べて、前半に関してはより情報が少ない。しかし、上記の人々をすべて含めると、新聞記事などから東京を中心に25人から30人ほどのフィリピン人学生がいたことがわかる。⁴⁾これは東南アジア出身者としては、タイと並んで最も多かった [村田1978]。このうち、慈恵医大に在籍した学生ないし元学生が少なくとも半数程度を占めていたと考えられる。というのも、これに相当する同校在籍者数を表記する新聞記事があるだけでなく、「慈恵会医科に出願スルモノ多シ [JACAR Ref. B04011345400]」や「主として慈恵医大に在学し [朝日新聞 1933年7月27日]」といった言説が示すように、「フィリピン人留学生≒慈恵医大生」という図式が当時受け入れられていたとみられるからである。⁵⁾

この時期、日本がフィリピンからの留学生をよりいっそう集めた背景に、どのような状況があるのだろうか。関連性が考えられる事象としては、アメリカーフィリピン間の「距離」の拡大がある。アメリカにおいては、1924年の移民法によってアジアからの移民が事実上停止された中で、アメリカ市民権はないものの属領住民としてフィリピン人たちは、彼らを代替する貴重な労働力として大量に導入されるようになった。その結果、対中国人や対日本人と同様の反

3) 本稿では最大数を示しているデータを優先して使用する。

4) 当時の新聞で、フィリピン人留学生の人数に触れているものをあげてみると、東京在住の留学生24名 [読売新聞 1933年7月26日]、約25名 [朝日新聞 1933年7月27日]、23名 [朝日新聞 1934年8月17日]、30余名 [朝日新聞 1935年11月16日]、といった数字が見られる。

5) 読売新聞は、慈恵医大で学んでいたフィリピン人学生は14名と記している [読売新聞 1933年7月26日]。慈恵医大には予科もあったが、閲覧可能な資料を見る限り1941年までに予科に在籍したフィリピン人はいない。

感を向けられ、1929 年には最初のフィリピン人排斥暴動が発生し、以後繰り返されることになった。一方日本は、1931 年の満州事変勃発以降のさらなる勢力伸張が、ミンダナオ島ダバオの日本人社会の拡大とともに、恐怖心も含めた日本の存在感をフィリピンにおいて高めていた [大野 2008]。

こうした国際情勢を背景として、より直接には日本の政策が、留学生の増加を導いたと考えられる。その意図は 1929 年 10 月 29 日付マニラ総領事発の外務省記録の中の、

本邦ニ於イテ入学不可能ナレハ米国に転学セシムル意向ナルカ日本仕込ミノ比島人カー人
ニテモ多キコトハ今後本邦ノ対比発展上便宜アルヘシト思考スルニ（以下略）

[JACAR Ref. B04011345400]

という文章にも見られる。

当時は、1928-29 年でアメリカの大学に登録されていたフィリピン人学生が 896 人であったことでもわかるように [Buenaventura 1995]、留学希望者はアメリカへ赴くのがやはり主流であった。これに対して、可能な限り多くの留学生を受け入れることが日本の国益にかなうと考えられていたのである。そのための施策が、先述の「文部省直轄学校外国人入学規定」を踏まえて、個々の大学が文部省から認可を得て導入した課外生あるいは外国人特別生という制度である。これは、外務省や在外公館、在日外国公館から推薦を受けた一定の学力を保持する留学生を、定員外に身分を設定して入学を許可するものであった。例えば、データが残されている 1930 年 7 月に関していえば、慈恵医大に課外生として在籍していた学生の出身地は中国（9 名）、フィリピン（7 名）、台湾（1 名）であり、この記録に残るフィリピン人在学生のすべてがこの制度によっていた [東京慈恵会医科大学 1930: 119]。少なくとも慈恵医大では、正規課程学生がほとんどの朝鮮や台湾といった植民地出身者と異なり、当時の大部分のフィリピン人留学生はこの制度で在学していたと考えられる。これは慈大愛宕新聞に毎年 4 月記載される正規入学名簿にフィリピン人留学生の名前がないことから裏付けられる。

この施策によって門戸が広がったことは大きな留学誘因となったと考えられるが、それではなぜ医学を学ぶものが多く、そして彼らが慈恵医大に集まったのだろうか。ホセは考慮しうる要因として、医学部に関しては、日本の大学の 1 年あたりの学費は高いが修業年限が 4 年と、5 年が必要なフィリピンよりも短いゆえに、安価に卒業が可能であったことを指摘している [Jose 2002: 72]。これは 1 年次から日本の大学に在籍し、卒業する学生に関しては当てはまる。しかし、後述するようにフィリピンから来た留学生の大部分は卒業まで至っておらず、また留学生は希望の学年に編入可能であったことから、この考え方は一部にしか当てはまらないといえる。推定されるのは、上記した国際情勢の下、門戸が広がったことを利用して、自国では難

関である大学医学部に所属する（そしてあわよくば、より短期間で学位をとる）、勢力拡大が著しい日本の教育や社会を体験する、あるいは自己の将来に有益となりうる日本とのかかわり（日本語の修得や人脈の確保）を持つ、といった理由である。したがって多くは卒業せずに帰国したし、昭和医学専門学校に学んでいた2人の学生のように、双方とも「日本語不十分ノ為欠席多ク、不真面目（1935年2月18日文部次官から外務次官宛の外務省記録 [JACAR Ref. B04011345400]）」と捉えられる事態が生じたりした。学業へのこうした対応、以下で述べる事件を引き起こすような比較的余裕のある日本での生活ぶりから、彼らは相対的に恵まれた社会階層出身であると想定される。閲覧可能な卒業アルバムに名前を残す12名には、貧困地域の出移民地として知られるイロコス地方出身者は含まれておらず、マニラを中心としたルソン島中・南部出身者が大部分であることも（名簿や卒業アルバムの写真などから、ほぼすべてが男性であったと考えられる）、これを反映しているのかもしれない。

彼らが日本での遊学にあたり、慈恵医大を選択することが多かったのは、この大学には英語重視という特色があったからである。第二次世界大戦終結前の日本では、医学におけるドイツ語の影響力は非常に大きかった。慈恵医大がこれに沿わなかったのは、英国留学経験のあった創設者高木兼寛の存在ゆえで、前身である成医会講習所（1881年5月創立）では英語が基本的な言語であった。その後次第にドイツ語が重視されるようになるとはいえ、英語での研究発表も行われるなど英語による医学修得が大きな特徴であり続けた。アメリカの植民地支配の中で、英語の普及が進んだフィリピンの人々にとって、慈恵医大は日本で医学教育を英語で受けられるほとんど唯一の存在であったのである。

こうして結果的には外務省（および文部省）の思惑にそってフィリピンからの留学生は増加したが、これが日本社会の総意ではなかった [Jose 2002: 72-73]。例えば彼らの多くが属していた慈恵医大の慈大愛宕新聞でも、彼らに関する記事は30年代前半にはほとんどない。この新聞には、同大学の在校生や卒業生に関して、居住地の変更やクラブ活動、就職先などが詳細に記載されている。したがって彼らについての記載が皆無に近いことは、彼らの人数が相対的に少なかったがゆえに、彼らに日本人の視線が届かなかっただけでなく、⁶⁾日本人が好意的な視線を届けなかったゆえでもあろう。この時期のほとんど唯一の彼らに関する記述は、次のようないわば「一言コラム」である。

旅の恥は掻きすてと云ふが、フィリツピン留学生の心理は確かにそれであり、全部が全部極重悪人でもなかつた [慈大愛宕新聞 1933年8月1日]。

6) 当時の慈恵医大の正規学部生数は650人前後で推移していた。したがってフィリピン人留学生のすべてが課外生ないし外国人特別生などの日本人とは「別枠」で20人前後であったと仮定して、その比率は3パーセント程度である。加えて同大学には500人弱の予科生がいた。

これが大学内の視線のすべてではないであろうが、当時フィリピン人留学生に対する偏見が学内にあったことは間違いない。この彼らに対する否定的な見方を生んだ直接的な原因は、1933年6月に発覚したフィリピン人留学生による「醜行事件」である。この事件を盛んに取り上げていた読売新聞の見出しをいくつかあげてみたい。

「不良外人一掃に まづ比島留学生狩り」〔読売新聞 1933年6月23日〕

「また比島の留学生 ダンサー数名弄ぶ 不良外人に愈よ鉄槌」

〔読売新聞 1933年7月20日〕

「医学修業は名のみ 日本へエロの遠征」〔読売新聞 1933年7月26日〕

これらの記事によると事件のあらましは、フィリピン人留学生の多くがダンサーなどの日本人女性に、医学生であることを利用して言葉巧みに近づき暴行したり、妊娠させた相手を乱暴な手段で墮胎させたりしたというものである。こうした報道には、当時の日本人のフィリピン人に対する差別的な視線が反映されているといえるだろうが、今日の外国人あるいは留学生に関する一方的な報道をほうふつとさせるところがある。またこれらの記事には、フィリピン人の相手であった日本人女性について「恥ぢよ 大和女性」「日本娘のだらしなさに呆れ」といった記述があり〔読売新聞 1933年7月26日〕、同時期の朝日新聞にも「まだ眼がさめぬ 日本女性の外人崇拜病！」という見出しがつけられており〔朝日新聞 1933年7月27日〕、外国人男性と自国民女性の組み合わせに対する偏見も見出すことができる。

この事件で矢面に立たされたのは、検挙された大部分のフィリピン人を受け入れていた慈恵医大であった。一連の記事の中でも、東京にいたフィリピン人留学生の多くが「本国フィリピンにゐても性行不良者であり正式に認可されてない最下級の医学学校を中途退学したり落第したものが多く慈恵医大が試験もなく留学生らの希望学年へどしどし入学させてゐるのをよいことに」日本に来て、「学業はそつちのけで女漁りに狂奔してゐた」と書かれている〔読売新聞 1933年7月26日〕。結果的に慈恵医大は、先述の課外生や外国人特別生といった制度を抜け穴として学力不足の問題の多い学生を招いたとして、文部省から本科に欠員のない場合は留学生を入学させず、入学時には素行や学力などを慎重に調査するようにという警告を受けることになった〔読売新聞 1933年7月22日〕。こうした事態を受けて慈恵医大は、在籍しているフィリピン人学生の停学、新規受入の停止に踏み切った。

しかし結末においては、実際に検挙にいたった10数人のうち、「罰」として1名を国外追放したものの、残りは日本における在留、在学が許可され、また慈恵医大もフィリピン人学生の受け入れをまもなく再開して事実上幕引きとなった。⁷⁾これは、東京にいたフィリピン人留学生

7) 読売新聞によれば二人が送還されている〔読売新聞 1933年9月26日〕。

は皆不良といわんばかりの一連の報道や警察の検挙に対する反発が在日フィリピン人たちの間に広まり、またこの事件による日比関係の悪化、それにとまなう在日日本人への悪影響を懸念する外務省の意向があったためである [Jose 2002: 75-78]。この事件の経過には、当時の日本社会における留学生の位置と意味、つまり外交的手段として受け入れを図る外務省（及び文部省）と積極的にそれができない日本社会一般という構図が表されている。

しかしながら、こうした図式に収まらないフィリピン人と日本人との交流も存在した。これが端的に表れているのが、慈恵医大がフィリピン人学生の停学、新規受入の停止をしていたときに、同大に対してフィリピン留学生たちがその解除を求めて出した決意文である [JACAR Ref. B04011345400]。ここには、今後勉学に励むとする彼らの意思表明を裏書するために帝国大学教授や牧師といった彼らを支援していた日本人の名前が挙がっている。⁸⁾同様に学内においても良好な関係が少ないながらもあったと考えられる。慈恵医大でこの具体的な場となったのが、1929年11月に公認された「慈大英語会」というクラブである。結成当初、このクラブでは読解力の向上のために丸善から取り寄せた洋雑誌の輪読をおこなっていたが、会話に関しては留学経験者である教員とともに、フィリピン人留学生たちが教材を提供して会員の勉強に協力していた。当時の模様を記した記事の中で元会員は、彼らの貢献を「儀狹的」であったとしている [慈大愛宕新聞 1939年11月1日]。このように留学生が日本人の学生クラブに参加して「活躍」することが1930年代初めにもあったのである。ただこのクラブに関する記事は1939年に結成10周年を記念して書かれており、1930年代後半の時代背景を反映している可能性がある。

II フィリピン独立準備政府の成立と留学生——1930年代後半の動向

前章末で示唆した時代背景、すなわちソフト・パワーの源として留学生をより重視する風潮が日本社会の一部に表面化するのには、実はフィリピン人留学生たちの「醜行事件」の生じた時期と重なる。というのもこの時期、日本を巡る人・モノ・カネ・情報のトランスナショナルな移動が活発になる一方で、1933年3月の国際連盟脱退以降、日本は国際的孤立を深めていたからである。この打開を目指すために帝国主義的な意図を含みつつも、「国際交流」の拡大を図る動きが徐々に官民で出現してきた [芝崎 1999]。そこで留学生政策もその一角としてより重要な意味を持つようになった。当時はまた、中国人を中心とした留学生の滞日経験が必ずしも親日派を生み出さないという、今日もしばしば指摘される問題への対処が問われ始めた時期でもある。

8) その一人である丸山傳太郎は、キリスト教徒として、中国やフィリピンからの留学生を受け入れる寄宿舎を東京で営んでいた。彼は、留学生支援者として外務省や後述比隣協会などにも知られた存在であった。

具体的には例えば、のちに日比学生会議を創始する日本英語学生協会が日本文化同盟とともに主催した、『留学生慰安の夕』が中国人を中心に約600名の留学生を集めて1933年11月末に行われている。大学関係者や前外務大臣、中華民国公使なども出席して行われたこのイベントのポスターには、「国民外交は家庭から」「留学生を優遇ませう」の文字が躍っていた〔JACAR Ref. B04011347000〕。続いて、1934年4月に文部省と外務省の外郭団体として国際文化振興会が発足し、日比間も含む「国際交流」の促進に従事するようになった。さらに1935年11月には外務省の所管で国際学友会が設立されている。国際学友会は、中国人を除く留学生に宿舍を提供し、日本語教育や大学進学前の準備教育を与え、進学先を斡旋し、これによって語学力の不足や習慣の相違から彼らが直面することの多い学業や生活上の問題を緩和することを主な役割としていた。この組織は、タイをはじめとして東南アジア諸国の留学生を中心に支援したが、そこには留学生を通じた日本の影響力拡大が意図されていた〔河路 2003: 130〕。

日本に最も近いフィリピンに関しては、1930年代半ばになって、こうした政策の重要性をより意識させる事態が出現する。それが1934年に制定されたタイディングズ＝マクダフィ法による、1935年の独立準備政府の発足である。これによって外交を除く大部分の政策がフィリピン人の手にゆだねられ、フィリピンは1946年の完全独立に向けて歩みだしたのである。これを受けてフィリピン人青年の日本留学への関心が急激に高まり、日本総領事館に問い合わせが殺到する。というのも、アメリカとの特別な関係が清算されることになり、勢力拡大が続く隣国日本の存在がより注目を集め、また独立国として比日関係を再構築する必然性にせまられたからである〔寺見 2004〕。日本側もこうした情勢を踏まえ、フィリピンとの関係を構築する上で、いかに友好に、そして有効にフィリピン人留学生を受け入れるかが検討されていた。これは1934年7月20日発の外務省アメリカ局長から文部省宛の外務省記録にも示されている。

目下在比律賓本邦人数ハ約二万ニ達シ今後モ猶各方面ニ發展ノ余地有之ヤニ思料セラルルモ他面邦人ノ發展ニ対シテハ排日的論議ヲ聞クコトモ有之今後同島独立問題ヲ中心ニ日比ノ関係ハ愈々慎重ノ考慮ヲ要スルヤニ思料セラルル折柄比島民中本邦ニ於テ學術修得ノ希望ヲ有スルモノニ対シテハ出来得ル限り其希望ヲ達成セシムルト共ニ我方學術文化ヲ了解セシムル様仕向クルコト大局上得策ナルヘシト思料セラルル（以下略）

〔JACAR Ref. B04011345400〕

国際学友会とともに、こうした方針を具体化するフィリピン人留学生施策を担うために1935年に文部省と外務省の肝いりで比律賓協会が発足した。この組織の主な事業目的は、フィリピンとの親善・文化交流であったが、在日フィリピン人留学生、および日本への留学希望者に対

する様々な斡旋や指導、支援が重要な部分を占めていた〔早瀬 2003: 10〕。⁹⁾

これまでみてきたような国際環境と政府の動向は、1930年代前半と比べてより新聞メディアに意識されるようになったようである。これをここでは当時のフィリピン人学生をめぐる報道のあり方からみてみたい。まず1936年に、映画スターであった水久保澄子と慈恵医大留学生のバレンティン・エデイ・タンフツコとの結婚、そして翌年の破綻という「事件」が起こる〔読売新聞 1936年6月27日；朝日新聞 1937年11月2日〕。¹⁰⁾ この離婚の要因が「富豪の御曹司」という彼の詐称にあるとされたことから、フィリピン人留学生のイメージを悪化させたと考えられる。しかし1930年代前半の事件と類似したジェンダー関係があるにもかかわらず、かつてフィリピン人留学生全体を悪者扱いしたような報道はなされなかった。もちろん小津安二郎や成瀬巳喜男などの作品に出演していた水久保澄子という有名人が話題の中心であったこともあるが、留学生を取り巻く状況の変化もそこに反映されていると考えられる。同様のことが慈大愛宕新聞でもいえる。この新聞で1930年代前半において留学生を主題とする記事は、先にあげた数行のコラムのみであったが、1930年代後半になると、前出の英語会の記事に加えて、外国人特別生が「医学を通して外交親善に竭したる功績は相当大なるものがある。」といったことを記す記事や〔慈大愛宕新聞 1936年4月10日〕、留学生の学位に関わる記事などが少ないながらも書かれるようになった〔慈大愛宕新聞 1938年3月20日〕。留学生個人についても、先述の水久保とタンフツコの結婚騒動の直後に、「感心なザバトヴセンテー君」という見出しでフィリピン人の模範的学生を取り上げている〔慈大愛宕新聞 1937年12月5日〕。彼は、昼はまじめに勉学し、夜はダンスホールでサクスを吹いて学費を稼ぎながら、慈恵医大を卒業した人物と紹介されている。彼が「奇篤な比律賓人」とされたのは、余った金銭を祖国の母親に送金するといった本人の行動がもちろん大きいのであろう。しかし、彼がかつて「悪辣な不良比島人」とされた学生たちと同様、在日中に日本人ダンサーと交際し、彼女と結婚して子供をもうけていることを考慮すると、この記事に時代の風潮を読み取ることができよう。これは彼の帰国時にも示されていて、1938年彼は二人の留学生とともに「蜚雪の功成つた比島立志伝三人男」として紹介されている〔慈大愛宕新聞 1938年5月1日〕。彼らは華族の親睦団体の拠点であった華族会館で開かれた比律賓協会主催の送別会に招かれた。この種の催しが同協会によって行われるのは初めてであったが、このときにはフィリピン人留学生や協会関係者（会長の徳川頼貞侯爵以下16名）に加えて、陸軍士官学校教官や外務省アメリカ局課長などが集まった。また招かれた留学生の一人ホセ・S・ラウレルはフィリピンの著名政治家一族出身で、フィ

9) この他フィリピンにも1936年9月に日本に関する情報提供と、日本への留学希望者の支援を目的とする日本案内所が設置された〔寺見 2004: 167〕。

10) 当時のフィリピン人名の表記は、同一人物であっても資料によって、同一新聞でも記事によって異なっている。本稿では、混乱を避けるために引用資料の表記の一つで統一することにする。

リピン人初の日本陸軍士官学校卒業生であることをみると、¹¹⁾ このころの留学生在が日本の対外政策の中により明確に位置付けられるようになったことがわかる [比律賓情報 1938年]。もちろんこれまで述べてきたような傾向が、当時の日本人全般の意識を反映しているとは短絡的にいえないが、少なくともフィリピン人留学生との向き合い方における日本社会の変化を、メディアが意識していたことはまちがいない。

しかし下記の表1にあるように、1930年代後半フィリピンからの留學生数は減少している。先述したような留學生に対する比較的積極的な日本社会の傾向にもかかわらず、彼らが日本から離れていった大きな要因は、日本の帝国主義的野心が、1937年7月の盧溝橋事件以降の中国への軍事侵攻によってよりむき出しになってきたためと考えられる。すでにタイディングズ＝マクダフィ法によって近い将来の独立が決定していたフィリピンの人々にとって、こうした日本の存在は現実の脅威として「恐日」感情を拡大させ、日比間の交流全般がしばんでゆく結果を生み出したのである [寺見 2004]。つまり、日本のハード・パワーの拡大が、このときはそのソフト・パワーにマイナスの影響を与えたのである。これは、30年代末には留学者数が100名を超えるまでに増加したタイとは対照的である [村田 1978]。

このフィリピン人留學生の減少にも影響していると考えられるのが、上記の送別会に象徴されるように、慈恵医大がもはや突出した留学先ではなくなったことである。彼らの受け入れ先が拡散してきたことは、以下の表1を見れば一目瞭然であろう。30年代前半までは10人を超えることがめずらしくなかった在籍者数は減少し、1941年11月のデータでは、少なくとも正規の在籍者は皆無になっている [東京慈恵会医科大学 1941: 108]。これを踏まえると、慈恵医大の同窓会新聞における彼らに関する記事の増加が、同大での在籍者の減少と相反する形で生じていたことがわかる。

慈恵医大におけるフィリピン人留學生減少の要因については、先述の国際環境の影響に加えて、いくつか想定することができる。一つは、1930年代半ばから、日本人移民の子弟や非勢力圏からの留學生の増加もあって、日本語教育の場がより充実してきたことである。国際学友会がその例だが、これによって、国内の日本語教育が貧弱なフィリピン人留學生の進学先の選択肢が増加したと考えられる。ただこうした、いわば「入学前教育」が整備されたこともあり、1935年以降は日本語能力の不足を主因に、本人が特定の教育機関を希望していても、比律賓協会の手配で国際学友会に送られるケースが出現した [比律賓協会 1938: 45; 1939a: 12; 1939b: 1, 8]。1935年以前は日本語に多少難があっても、日比有力者からの推薦で希望の教育機関に入学することがまあり、その結果先述した昭和医学専門学校所属の学生のようなケースが出現した。日本語能力重視は、このような入学後の問題を未然に防ぐ意味があったが、滞日期間の長期化

11) 彼の父親ホセ・P・ラウレルは日本軍政期に共和国大統領になるなどの要職を歴任した。ラウレル家は第二次大戦後も影響力を保持し、ホセ・S・ラウレルも駐日フィリピン大使を勤めたりした。

表1 フィリピン人留学生の就学先（1935～39年）

大 学 名	1935 年	1936 年	1937 年	1938 年	1939 年	合計
東京慈恵会医科大学	7	2	2	3	2	16
日本大学	1	3	5			9
桐生高等工業学校（現群馬大学工学部）	1	1		2	3	7
昭和医学専門学校（現昭和大学）	2	1	2	2		7
国際学友会（現日本学生支援機構）					5	5
水産講習所（現東京海洋大学）	2		1		2	5
日本飛行学校	3	1	1			5
セントジョセフ・カレッヂ*	2		2			4
国際学院		1	2			3
名古屋飛行学校	1	1		1		3
日大医学専門学校**	3					3
東亜学校				2		2
東京商科大学（現一橋大学）				2		2
日本歯科医学専門学校（現日本歯科大学）				1	1	2
日本陸軍士官学校		1	1			2
立教大学		1	1			2
早稲田大学			1		1	2
京都高等工芸学校（現京都工芸繊維大学）				1		1
慶應義塾大学	1					1
名古屋高等工業学校（現名古屋工業大学）		1				1
日語文化学院	1					1
羽田飛行学校					1	1
明治大学			1			1
学校外研究生			1			1
無学籍				2	1	3
合 計	24	13	20	16	16	89

出所：[内務省警保局編 1980] より筆者作成。

注：* 1937 年は、「セントジョセフスクール」と表示。

** 原文ママ。日本医学専門学校（現日本医科大学）のことであると思われる。

を受け入れられないフィリピン人にとっては、来日を回避する要因になった可能性がある。

慈恵医大の在籍者が減少したもう一つの理由は、この大学自体における変化である。この時期になると「英語の慈恵」と呼ばれた面影はよりいっそう希薄になっていた。このため言語の上で、あえて慈恵医大を希望する必然性がなくなったのである。現に、日本語能力の不足を理由に慈恵医大入学希望者が国際学友会に送られている [比律賓協会 1939a: 12; 1939b: 1]。この慈恵医大の変質は、英語で教育を受けられることを念頭に日本に来ていた層の来日を思いとどまらせ、留学生減少の一因となったと考えられる。

こうした環境のもと、日本の留学生政策は、フィリピン人に関しては 1930 年代後半に成果をあげることはできなかったのである。

III 卒業と進路

既述のように時期によって総数や在籍先に変化があるが、留学生が所定のプロセスを経れば卒業に至るのは、当然ながら不変である。1930年代において卒業資格を得たフィリピン人がどれほどいたのかは、はっきりしない。例えば慈恵医大についても、卒業したフィリピン人の数は、同大学発行の資料によってもまちまちである。ここでは、筆者が閲覧しえた資料の中で、1940年までにに関して最も多くのフィリピン人卒業者の名前を記しているデータを示したい（表2）〔東京慈恵会医科大学 1941〕。

これを見れば、卒業にまで至った留学生は、在籍者のうち少数であったことが推定される。当時の新聞などから彼らは卒業直後に帰国するよりも、日本で研修・就業してから日本を離れるものが多かったことがわかる。例えば先述の比律賓協会主催の送別会に招かれた3人の留学生についていえば、陸軍士官学校を卒業したラウレルは近衛野砲連隊に見習士官として入隊し、もう一人の学生は桐生高等工業学校（現群馬大学工学部）を卒業後、香川県高松市の県立工業試験場で製紙法を学んでいた〔比律賓情報 1938年〕。本稿で主に取り上げている医学生の場合、この送別会に加わったザバトヴセンターのように、病院に勤めて研鑽を積むことが多かった。これは当時の日本人卒業生もたどった一般的なコースである。具体的には、慈恵医大出身の場合、関係の深い慈恵病院に行くことが多く、1936年に彼と同時に卒業した三人のフィリピン人のうち、二人は彼とともに同病院で勤めたことがわかる〔慈大愛宕新聞 1936年4月10日〕。またザバトヴセンターのように慈恵病院で研修した後、あるいは卒業直後、聖路加国際病院に赴くこともしばしばあった。この病院は、1902年にアメリカ人の宣教医師ルドルフ・トイスラーによって設立され、1933年には地上6階地下1階の本館を有する大規模病院となっており、慈恵医大出身者だけではなく、日本大学などのフィリピン人卒業生が何らかの形で働いていた。

一般的には比較的短期間の就業の後、帰国するケースが多かったが、なかには長期間日本にとどまったものがある。なかでも注目されるのが1925年に慈恵医大を卒業したホセ・M・ガエランである。彼はルソン島北部のパングシナン州出身で、卒業後まもなく聖路加国際病院に職を得ている。ガエランは、1920年代末頃に東京にあったフィリピン人学生協会（Pilipino Students Association）の会長であり、ホセ・リサールの殉死を記念して、1929年12月30日に

表2 フィリピン人留学生慈恵医大卒業者数

年	1911 (明44)	1913 (大2)	1915 (大4)	1916 (大5)	1923 (大12)	1925 (大14)	1932 (昭7)	1934 (昭9)	1935 (昭10)	1936 (昭11)	1939 (昭14)	1940 (昭15)
数	1	1	2	2	1	5	4	2	4	4	1	1*

注：*この人物は「修了者」と記載されている。「卒業者」との相違は不明である。

外交官や著名人を招待して行われた同会主催の午餐会の開催に尽力している〔*The Japan Times and Mail* January 6, 1930〕。1933年には、フィリピン・マニラに新設された「アフアプレ医学校」による慈恵医大教授の招聘要請にあたって連絡窓口のような役割を果たしている。この提案は実現しなかったとはいえ、日比の学術関係の一翼を担う位置に留学生が存在したことは、想起すべき点であるといえる〔慈大愛宕新聞 1933年7月5日〕。また先に論じた「醜行事件」の際の学生たちによる決意文に、幾人かの日本人とともに彼らを支援するために名前を寄せている。さらに独立準備政府の初代大統領就任式当日（1935年11月15日）、日本でも比律賓協会によって「独立祝賀会」が先述の華族会館で開かれたが、招かれた30人あまりのフィリピン人留学生代表がガエランであった。彼は日本側からの祝辞に対して答辞を述べ、フィリピン人留学生への日本社会からの支援に対して感謝の意を示している〔朝日新聞 1935年11月16日；比律賓協会 1936: 49-50〕。このように、1936年10月頃に帰国するまで〔比律賓協会 1937: 52〕、彼は日本におけるフィリピン人学生に関わる行事や出来事にたびたび登場し、後輩たちを支援し、フィリピン人コミュニティと日本社会とを結ぶリーダー格になっていたと想定される。こうした役割を彼が担ったのは、在日期间が長期に渡ったことによるだけでなく、聖路加国際病院で放射線科長、そして物理療法室科長に任じられたことで示されるように、フィリピン人として稀有なことだが、彼が社会的に認知される立場にあったためであろう〔聖路加国際病院 100年史編集委員会 2002: 104, 291〕。

このガエランをはじめとする留学生たちが、帰国後どのような人生を歩んだのかは、卒業に至らなかったものはいくつまでもなく、卒業したものもほとんどが同窓会に参加しなかったこともあって不明なところが多い。¹²⁾ 当然ながら、医学部卒業後、フィリピンに帰国したものは、当地で医師となったと考えられる。また慈恵医大を出て香港—アモイ間の船医となったものがいたように、フィリピン外に活路を求めるケースもあった。なかにはフィリピン社会で認知される存在になったものもいたようだ。先のガエランの答辞の中にも日本留学の成功例として、開業医や官吏となった慈恵医大出身者3名の名前が挙げられている〔比律賓協会 1936: 49-50〕。¹³⁾

お わ り に

本稿では、1930年代を中心に太平洋戦争開戦前における、フィリピン人留学生に対する日本政府の政策、そして日本社会の対応を論じてきた。フィリピンは日本にとって地政学的にも、多くの日本人を受け入れているという点でも重要な存在であったため、その留学生はフィリピ

12) 戦争終結以前の慈大愛宕新聞で閲覧可能であるのは1940年12月までである。

13) 彼は他にも医科大学出身者ではないが、名古屋で学びフィリピン商工会議所会頭になった人物の名前も挙げている。

ンにおける日本のソフト・パワー増強のための手段として、日本政府に意識されるようになっていた。しかし 1930 年代前半までの新聞に示された日本社会の反応は、必ずしもこれを踏まえたものではなかった。1930 年代後半に入ると比米関係の変化もあって、フィリピン人留学生の重要性に関する認識は相対的に高まり、これを反映したと考えられる記事が新聞にも増加するようになった。しかし皮肉なことに、この時期にフィリピン人留学生数は減少した。こうした経過には、学生個人の意図と大学の方針、受入国の留学生政策や社会的動向、そして国際関係といった今日の留学を考察するに当たっても欠かせない点に加えて、当時の帝国主義的なヘゲモニーをめぐる列強諸国間の争いが影を落としていたことがわかる。

この時代の日本留学経験者に関しては明らかになっていないことがまだ多いが、とりわけ日本によるフィリピン占領期にいかなる役割を果たしたのかは、ほとんど知られていない。当時の軍関係者が参加したマニラ新聞（日本占領期にマニラで発行されていた日本語新聞）主催の座談会によれば、フィリピン統治において「医療が最上の宣撫」と意識されていたことがわかる。しかし同会の中で、占領前に日本で医学を修めた留学生については「位置は低くても技術はよいといふことを認められてゐるやうです」と記されているのみで、彼らの「活用」は議題に上っていない〔マニラ新聞 1942 年 11 月 5 日〕。こうしたことを踏まえると日本の占領とどのように向き合うかはフィリピン人個人の判断によるところが大きかったと考えられる。実際に日本軍の統治に積極的に協力した唯一著名な元医学留学生は、1930 年代以前の学生だが、名古屋の医学専門学校をでたフーリオ・ルスである。彼はフィリピン占領後の日本軍のプロパガンダ活動に通訳などとして参加している〔日本のフィリピン占領期に関する史料調査フォーラム編 1994: 499-504〕。一方で過去の経歴を生かして日本人を顧客としようとするものもいた。例えばマニラ新聞を見ると、日本語を話せることと、「東京慈恵会医学専門学校卒業」、あるいは「日本大学卒業」をうたい文句に広告をしばしば出していたフィリピン人医師が複数いたことがわかる。こうした元留学生とフィリピン人社会や在比日本人社会との関係、あるいは太平洋戦争中の南方特別留学生との関係の解明も今後の課題といえるだろう。

謝 辞

本稿執筆にあたって、東京慈恵会医科大学学術情報センター図書館・史料室の皆様のご協力を賜りました。厚く感謝申し上げます。

参 考 文 献

- Buenaventura, Steffi San. 1995. Filipino Immigration to the United States. In *The Asian American Encyclopedia*, Vol. 2, edited by Franklin Ng, pp. 439-453. New York, London and Toronto: Marshall Cavendish.
比律賓協会. 1936. 『昭和十年度比律賓協会会務報告』東京：比律賓協会。

- . 1937. 『昭和十一年度財団法人比律賓協会々務報告』東京：比律賓協会.
- . 1938. 『昭和十二年度財団法人比律賓協会々務報告』東京：比律賓協会.
- . 1939a. 『昭和十三年度財団法人比律賓協会々務報告』東京：比律賓協会.
- . 1939b. 『昭和十四年度上半期財団法人比律賓協会々務報告』東京：比律賓協会.
- Goodman, Grant K. 1967. *Four Aspects of Philippine-Japanese Relations, 1930–1940*. New Haven: Southeast Asia Studies, Yale University.
- 早瀬晋三. 2003. 「復刻版『比律賓情報——付録 比律賓協会会務報告』解説」『比律賓情報解説・総目録・索引（人名・地名・国名・事項）』早瀬晋三（編），3–23 ページ所収。東京：龍溪書舎.
- Jose, Lydia N. Yu. 2002. *Filipinos in Japan and Okinawa 1880s–1972*. Tokyo: Research Institute for the Languages and Cultures of Asia and Africa. Tokyo University of Foreign Studies.
- 河路由佳. 2003. 「国際学友会の設立と在日タイ人留学生——1932–1945 の日タイ関係とその日本における留学生教育への反映」『一橋論叢』129(3): 127–139.
- 木下 昭. 2009. 『エスニック学生組織に見る「祖国」——フィリピン系アメリカ人のナショナリズムと文化』不二出版.
- 村田翼夫. 1978. 「戦前における日・タイ間の人的交流——タイ人の日本留学を中心として」『国立教育研究所紀要 アジアにおける教育交流』第94集：187–214.
- 内務省警保局（編）. 1980. 『外事警察概況——極秘』（復刻版）東京：龍溪書舎.
- 日本のフィリピン占領期に関する史料調査フォーラム（編）. 1994. 『日本のフィリピン占領——インタビュー記録』東京：龍溪書舎.
- ナイ, ジョセフ・S. 2004. 『ソフト・パワー——21世紀国際政治を制する見えざる力』山岡洋一（訳）. 東京：日本経済新聞社.（原著 Nye, Joseph S. Jr. *Soft Power: The Means to Success in World Politics*. New York: Public Affairs, 2004.）
- 大野 俊. 2008. 『「ダバオ国」の日本帝国編入と邦人移民社会の変容』『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』蘭信三（編），721–752 ページ所収。東京：不二出版.
- 聖路加国際病院 100 年史編集委員会（編）. 2002. 『聖路加国際病院の 100 年』東京：聖路加国際病院.
- 芝崎厚士. 1999. 『近代日本と国際文化交流——国際文化振興会の創設と展開』東京：有信堂高文社.
- 寺見元恵. 2004. 「1930 年代の日本・フィリピン親善事業」『近現代日本・フィリピン関係史』池端雪浦；リディア・N. ユー・ホセ（編），159–198 ページ所収。東京：岩波書店.
- 東京慈恵会医科大学. 1930. 『東京慈恵会医科大学一覧 昭和 5 年 7 月』東京：東京慈恵会医科大学.
- . 1941. 『東京慈恵会医科大学一覧 昭和 16 年 11 月』東京：東京慈恵会医科大学.

公文書

JACAR（アジア歴史資料センター）

Ref. B04011345400. 在本邦各国留学生関係雑件（中国留学生ヲ除ク）7. 比島人（外務省外交史料館）.

Ref. B04011347000. 在本邦各国留学生関係雑件（中国留学生ヲ除ク）1. 一般（外務省外交史料館）.

新聞・雑誌

『朝日新聞』

1933 年 7 月 27 日. 朝刊, 9. 「まだ眼がさめぬ 日本女性の外人崇拜病！」

1934 年 8 月 17 日. 朝刊, 11. 「友邦の留学生達へ 温き好意を贈る」

1935 年 11 月 16 日. 朝刊, 11. 「比島留学生を招く」

1937 年 11 月 2 日. 朝刊, 11. 「水久保澄子 実演 国際結婚の悲劇」

『比律賓情報』

1938 年 5 月 15 号：36–37. 「比律賓協会主催比島人送別茶会」

The Japan Times and Mail

“Filipinos Celebrate Rizal Day in Tokyo,” January 6, 1930, 4.

『慈大愛宕新聞』

1933 年 7 月 5 日, 2. 「フィリッピン 医学校の招請」

8 月 1 日, 2. 「話題」

1936 年 4 月 10 日, 1. 「本学在学中の外国人特別生」

4. 「卒業生氏名」

1937 年 12 月 5 日, 2. 「感心なザバトヴセンテー君」

- 1938 年 3 月 20 日, 2. 「外国人卒業生には『MB』の称号を」
5 月 1 日, 2. 「蛍雪の功成つた比島立志伝三人男」
1939 年 11 月 1 日, 2. 「慈大英語会 誕生十ヶ年を迎えて」
『マニラ新聞』
1942 年 11 月 5 日, 1. 「新比島建設指導者としての日本人 本社主催座談会」
『読売新聞』
1933 年 6 月 23 日, 朝刊, 7. 「不良外人一掃に まづ比島留学生狩り」
7 月 20 日, 夕刊, 2. 「また比島の留学生 ダンサー数名弄ぶ 不良外人に愈よ鉄槌」
7 月 22 日, 夕刊, 2. 「ヒ島人の乱行に 慈恵医大へ警告」
7 月 26 日, 朝刊, 7. 「医学修業は名のみ 日本へエロの遠征」
9 月 26 日, 夕刊, 2. 「不良留学生 比島に送還」
1936 年 6 月 27 日, 朝刊, 7. 「水久保澄子さんが “国際花嫁”」